

# 日大島根桜信会便り

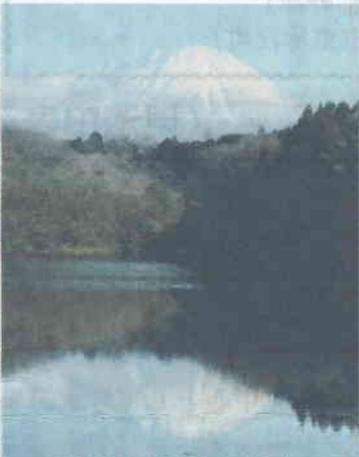
日大島根桜信会便り第29号【通算33号】

発行 令和3(2021)年1月1日

日大島根桜信会(日本大学通信教育部校友会島根県支部)

坂本育穂 〒690-0871 松江市東奥谷町256-3

Tel 0852-25-1419 Email sikutyan@mable.ne.jp



曇化粧した秀峰・大山と水面に



写真説明

写真左

岡成池と逆さ大山

「山陰中央新報」令和3年1月21日付け

写真右

マナツル飛来・隠岐の島町五箇

「山陰中央新報」令和3年1月20日付け

## 令和2年度校友会島根県総会中止について 校友会島根県支部長 坂本育穂

令和3年が早くも弥生の候を迎えましたが、校友諸氏にはご健勝のことと思います。本会に対して旧年中も格別のご支援・ご協力を頂き感謝に堪えません。なにとぞ本年も変わらずよろしくお願いいたします。

さて、大変遅くなって恐縮ながら新年のご挨拶と共に新年号をお送りします。表記のように新型コロナウイルス感染予防の為、今年度の総会を中止とし、令和2年度総括については役員のみでの検討協議としますので何とぞご理解の上ご了承下さるようお願いいたします。

島根県は幸いにしてコロナ禍圏外にあるようですが、油断は許されず、なお注意が必要だと思います。完全収束を目指して各自一層ご自愛に努められるようお願いいたします。

## 令和2年度校友会費(年額1,500円)納入の校友ご芳名(令和3年3月1日現在)

井上 明 (H28/文) 岩崎 幸夫 (S60/法) 河野 義男 (S58/商) 河津和彦  
(H11/経) 酒井 實三 (H07/商) 澤田寿子 (S45/商) 坂本 育穂 (S47/文)  
下山 司 (H01/法) 周藤 具 (S53/法) 滝尻行雄 (S50/文)  
田久和剛史 (H20/文) 錦職正明 (H10/商) 宮崎 健治 (S49/商)  
村上 謙武 (H06/経) (敬称略・五十音順)

毎年のご協力衷心より感謝致します。領収書に換えます。

## 令和3年度校友会費をお願いします

振替用紙を同封しています。

窓口手数料 203円

ATM手数料152円

ATMで納入くだされば事務局は51円多く頂けます。

1,500円



## 二つの戦記

(S48/文) 坂本 青穂

我が家の仏壇の引き出しには祖父の軍隊手帳と父（何れも故人）の戦友から送られて来た若干の戦地記録が今でも存在する。祖父が出征した日露戦争が終わって 115 年、父が戦った太平洋戦争が終わって 75 年だ。2 人が格別の貢献をした訳でもなく、国民の義務を果たしたに過ぎないかも知れない。しかし、祖父が亡くなって 54 年、父が亡くなって 74 年、私自身も傘寿を迎える段になって、件の記録が私と共に忘却の彼方に捨てられると思うと空しい。私の人生の最終章の埋め草の一つにでもなろうか。

### 1. 戦記一

祖父の軍隊手帳は手の平大の黒っぽい布表紙で、古くなって薄汚れた金文字で「軍隊手牒」とあり凡そ 50 ページに「勅諭」「讀法」「軍隊手牒ニ係ル心得」が活字印刷で、続いて本人の身分が毛筆で曰く「(所管) 第五師団 (部隊號) 第十七補助輸卒隊 (兵科) 輜重輸卒 (本貫族籍) 島根県平民 渡邊順市 島根県簸川郡高松村大字白枝五十五番屋敷」となっているが、「出戦務」欄は、「明治三十八年四月三十日補充ノ為広島湾要塞砲兵大隊ニ応召入隊」とある。資料に依れば当時広島湾内に防備の為 15 基近くの要塞があった。明治 17(1884)年生まれの平民渡邊順市は、簸川郡高松村大字白枝(現出雲市白枝町)から広島の第 5 師団に応召入隊した。私が子供の頃広島の軍隊へ頓原を越えて歩いた、と聞いたことがある。どんな経路を取ったのか詳らかではない。当時の日本陸軍の編成は全国 4 軍団の下に東京鎮台を始め 6 鎮台、鎮台の下に 6 師団があったが、順市は明治 38 年 5 月 5 日(何と 35 年後私が生まれている)「第十七補助輸卒隊補助要員トシテ宇品港出航」した。この時点で第 17 補助輸卒隊輜重輸卒になったと思われる。「輜重輸卒が兵隊ならば蝶々トンボも鳥の内」とザレ歌でからかわれる様に兵では無い一段低い「卒」の身分だった。これも祖父から聞いた話の断片に「料理人として隊長さんに可愛がられた」という。後に、松江の坂本家に入り婿して魚屋を助ける事になる下地があったのかも知れないが、入り婿云々の経緯は不明だ。同年 5 月清国(現中国)大連湾着。以後、安東県(大連に近く、朝鮮国境近くの小港か)、〇〇城本隊の兵站部、永陵兵站部に配属、6 月王家大堡、8 月 18 日「病ニ依リ王家大堡患者療養所入所」、9 月 6 日「治癒ニ依リ」退院。11 月奉天(現瀋陽)八〇着。「出勤」欄に「明治三十八年八月十八日ヨリ九月六日ニ至ル二十日間病ニヨリ入院ノ為メ欠勤」とあり、「軍隊手牒」欄は「明治三十八年八月第二旬分迄給料及増給共支給済 第五師団第十七補助輸卒隊」で終わっている。何の病気で 20 日間入院したのか聞いたことは無い。8 月 20 日までの給料支給と昇給があったのだろうか。大陸では 5 月の安東県から始まって 11 月の奉天までの凡そ 6 ヶ月が服務期間と見られる。帰国した年次は記載が無く全く不明だ。明治 37~38 年の日露戦争は日本軍 25 万、ロシア軍 31 万動員の下に戦われたが、所謂天下分け目の奉天会戦が日本軍勝利となって明治 38(1905)3 月 1 日戦闘は終結、同年 9 月 5 日の日露講和条約をもって日露戦争は終了した。従って、応召してから凡そ半年余りの期間は、前線に投入して危険な身に晒される事も無く、無事日本に帰国出来たようである。輸送等後方支援が主たる仕事の「輜重輸卒」の身分が幸いしたかも知れない。明治 17(1884)年生まれの順市は時に 21 才だった。なお地名について、当時は清国なので正確な地名は不明である。



## 2. 戦記二

「3月24日父須藤 暢が98才で永眠いたしましたにつき新年のご挨拶をご遠慮申し上げます。」という娘さんと思われる方からの挨拶状を受け取ったのはもう2年前の12月である。須藤氏は元日本海軍第12魚雷艇隊主計長で父の上司に当たる人である。以前から知悉していた方では無く昭和40年代後半、戦友会の通知を受け取ったのが切っ掛けで、数度の手紙のやりとりの中で分かったことである。現在手元に残っている手紙と資料の類いは須藤氏、増野善明氏、事務局の伊藤忠記3氏のもの。増野氏も234名の12魚雷艇隊員の一員だそうだが、父とは作戦行動が異なっており特に面識は無かったという。便せん8枚に海軍生活の綿密な記録を送って下さり、手紙の内容と残された写真から判断すると、父邦雄は昭和9(1934)年徴兵により海軍入隊、同年駆逐艦綾波(1.680t)、同吹雪(同)に主計科員として配乗、この間台湾、韓国に訓練航海。昭和15(1940)年(私が誕生)3月より16年4月頃まで海南島三亜16防備隊に配属、以下今度は須藤氏の手紙と手記によると、昭和19(1944)年6月呉軍港を輸送船によりフィリピンマニラ、ハルマヘラ島カウイ、ダバオ経由水雷艇に分乗、セブ島へ第12魚雷艇隊基地隊主計科分隊員として帰着。水雷艇は、爆



雷と機銃を搭載した24トンの小艇で、近海への米軍侵攻の都度、出動して米軍艦船と抗戦したが成果無く、水雷艇隊も海軍部隊共米軍上陸に備えたが、この頃にセブ島山岳地帯に陣地を構築してすでに同島は孤絶、糧食及び武器弾薬も殆ど断絶。20年3月米軍セブ上陸が始まると、日の丸陣地で抗戦したが遂に放棄して山岳地帯に撤退した。「闇夜の為一尺先も判らぬ状況の中、小生(須藤氏)以下の主計科分隊員7名程にて天山奥地に向かい、



一列で相互に背中を掴みながら道無き道を転進しました。翌早朝、セブ基地北方のリロアン付近の椰子林に到着し、夜明けと共に坂本兵曹、寺田上等主計(父の部下という)を探しましたが遂に発見できず、分隊員は小生以下2名の計5名となり、以後セブ山中では坂本兵曹とは別行動になりました」とのことだ。山脈(1,000m位)が、島を南北に縦断していたが、北端近い山中溪谷で寺田上等その他多数が戦死した。弾薬も糧食もつき、栄養失調とマラリアによる高熱に喘ぎながら、夜間の山中を逃避する過酷さ悲惨さ、そんな兵員中の1人に、父もいたと思うと涙を禁じ得ない。実に魚雷艇隊71%が戦死者という。戦争終結後、須藤氏及び父はセブ島、レイテ島米軍収容所で再会、「マラリアの訳か少し弱っている様子」だった。父は、須藤氏に先立って昭和20(1945)年11月、復員したので2人の再会はこれが最後となった。翌昭和21(1946)年7月、マラリアが再発した父は自宅で亡くなった。時に父邦雄は、大正2(1913)年生まれの28才、私は5才だった。「真面目な努力家で部下5名の面倒を良く見ておりました」という手紙、酒が好きだったという家人の話等から父の人柄が少しは思い計れるものの、幼年の私には、父と言葉を交わした記憶も余り無い。230万人と言われる日本軍戦死戦没者の中で、内地帰還を果たし、短期間ながらも家族に囲まれて生活できた父は幸せだったと言わざるを得ない。周囲にマクタン島、バンタヤン島等々の小島に囲まれているセブ島は面積4.422㎡、南北225kmの細長い島で、人口約300万人、州都セブ市は人口72万人、現在、表面的には戦火の傷跡も目立たず、リゾート地帯になっている処もあるようだ。